
月夜の下で会いましょう

通り上げ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の下で会いましょう

【Nコード】

N3830D

【作者名】

通り上げ

【あらすじ】

幽霊・人間・猫がそれぞれがそれぞれの想いをもち、出会った物語

ブログ第一部（前書き）

始めまして。通ります。

えっと・・・ご覧頂ありがとうございます。

この小説は、第一部と第二部と第三部とでは話の時期がずれているので、話がややこしくなると思います。

普通に読んだら「あれ？これネタバレ」ってのもいくつかありますし。

なので！！！！完結した後に読んでくださったらありがたいです

ブログ第一部

いつもの日常

建物が乱雑し、人であふれている。

いつもの風景

空を見上げれば光が鬱陶しいほどの快晴であったり、光が雲に吸い取られている曇りだったり、雫をたらす雨だったり。

平和な日常を過ごしてきて、僕は平和がつまらなくなった。

現実にはありえない光景。

未来からの敵。宇宙からの侵略者。秘密結社の世界征服。

そういうありえない出来事を僕は望んでいた。

くだらない日常には飽き飽きしていた。

いつもの建物を見上げて僕はため息しか出なかった。

ここで、日常の大半を過ごし、疲れた体に鞭をいれて、家へと帰宅する。

そして暇があれば人のいない公園に寄り、疲れを一時的に癒してたり街へ出て、必要最低限なものを購入していたり

そんな日常を鬱陶しいと思う僕に、

非常識なことが起ころうとしていた。

生ぬるい風が、冷たい風へと変わる頃、僕たちは出会ってしまった。
いや、出会ってしまったんだ。

偶然なんてものじゃない。何かのつながりを僕たちは必然的に出会ってしまった。

猫が貴方を知り、貴方は僕を見つけ、僕は猫を追う。

いくつもの、不可解な出来事が一致したとき

僕は

「月夜の」

と、囁くのだった。

ブログ第一部（後書き）

週2ぐらいでがんばろうかなと考えていますが・・・大学受験なので遅れることがしばしば。

ブログ第二部（前書き）

短編で出そうかなとも思いましたが、やっぱり、三人の物語とそれぞれの感情と視点の違いを読み取っていただけたらと思い、連載にしました

ブローグ第二部

誰も、俺のことを知ろうとはしない。

いや。関わりたくなかったのだ。俺も他人も。

俺はいつも一人だった。

俺は一人になれてしまった。むしろ、自分から一人を好んでいた。

俺みたいな奴がほかにいることもわからない。もしいたとしたら俺はどう接したらいいのだろう。

そういった、さまざまな思いを俺は胸に抱ええてずっと生きている。

もしゝなら、なんて希望があつたら俺はどうしようもなくその希望にすがりつくだろう。

今でも少しの希望を求めて歩いている。

生まれたときから、親に気味悪がれて、捨てられ

生まれたときから、自分で生きていくとこと強いたげられた。

自分に居場所なんて無いと、思ってた。

何年も何年も、俺は生きてきた。

死ぬことさえ許されず

生きることすら許されないこの世界で俺は……。

孤独と闇の中に光は差し込まない。音も届かないこの闇の中。けど、闇の中でランプをつければそこに光は届かなくても、そこに音がな

くならうとも、俺は明かりをつけることは可能なんだと知った。孤独の中でも、周りには手を差し伸べてくれる奴がいると知った。裏切られる可能性もあった。だけど、俺は信じたかった。奴を。俺があいつを見つけ、あいつが奴を知り、奴は俺を調べる。強くなりすぎた俺は、弱くなることを知らなかった。

二つの手が差し伸ばされたとき

俺は

「の下で」

と叫びながら、二つの手を取り合うのだった。

ブローグ第二部（後書き）

誤字脱字ありましたら報告お願いします。

ブログ第三部

周りには大勢の人がいる。

でも、私を見つけてくれる人はいない。

私には記憶がなかった。生きていた記憶がなかった。記憶がない私は何をすれば成仏できるの？

はやく成仏したい。早くこの人ごみの中から抜け出したい。
早く早く……。

誰もが私を見ない。誰もが私を触れない。

私には、それがわかりきっていた。

私に感情というものがなかったらこんなにも傷つかずにすんだのだろう。

なんで？ 皆は私に話しかけてくれないの？

なんで？ 皆は私を無視するの？

いくつもの想いが私の中を張り巡らして私の心を傷つける。

何年も同じ姿で、何年も服を着たことが無くて、何年も冷たさがわからなくて。

私の存在を証明できる人なんていない。

でも私はいくつモノ街を見てきた。街の中に希望があると思ったからだ。いくつもの出来事を見てきた。

傍観者にでもなった気分だった。

嫌だった。何もできない自分が。

だから……私は……

この手で、人に触れようとしても

この足で、地面をけろうとしても

この体で、人の温もりを知ろうとしても

何もかもが遅すぎたんだ。

紅葉が散り、枯葉へと変わったいく季節の中、私は出会ってしまっ
たんだ。

猫が私に話し、私は彼を追いかけ、彼は猫に餌をやる。
今まで気づけなかったことに気づいてしまった。
遅すぎた理解は、遅すぎた未来へと。

いくつもの奇跡が起きたとき

私は

「会いましょう」

と呟くのだった。

第一部「電車」(前書き)

更新が遅れました

第一部「電車」

「まもなく、電車が参ります。黄色い線の……。」
いつものように、アナウンスが流れる。

風が生ぬるく、列車が通過すると同時に、生ぬるい風がいつそう生ぬるく感じた。

電車の中から、人々が溢れ、外に出ようとしているが、それを電車の中に入ろうとするものが拒む。

なんとも、効率の悪い流れだな。

そんなことを思いつつ、僕は電車の中に入ってしまった。

駅がひとつひとつ通り過ぎるたびに、人が増えている。

電車の中に人口密度があれば、ここはすごいことになるな。と、くだらないことを考えながら、僕は周りの人々に押しつぶされる寸前だった。

電車の中でギュウギュウになりながら、僕は汗をかいていた。

別に僕が太っているわけではない。ただ、人が多くて、ジメジメしてて、なんだか少し夏を感じた。

こんな調子じゃ僕は電車から降りるときはぺしゃんこのスクラップになっているだろうな。

くだらない考えをしながら、僕は毎日の電車での時間をつぶしている。

目を上げると、綺麗な女の人が目に入った。

綺麗な人だな。もし痴漢に遭っているようなら僕がすぐ助けに入って、エロゲー的な展開に。

などと、やっぱりくだらないことを考えていた。

そういえば……あの綺麗な人……夢の中で見たような。

ふと、僕はこの前見た夢のことを思っていた。

大体の様子は忘れてしまったが、全身黒色の洋服を着ている女性、全身白色の洋服を着ている女性、見た感じは対照的かもしれないが、

それが周りの背景と絶妙にあつて、息を呑むぐらい美しかった。
改めて思い出すと、不思議な夢だったな・・・。

「次は」

ヤル気のないアナウンスが流れ

「もう着くのか」

と、もう少しばかり夢に浸っていたい僕がいた。

第一部「電車」(後書き)

ごめんなさい

すみません

情けないです

決してMじゃないです

第二部「犬」（前書き）

なんか・・・色々困ってます

第二部「犬」

今俺の目の前には相当ご機嫌斜めな犬がいる。

牙をむき出しにして俺を威嚇しているつもりなのだろうか？

はぁ・・・。

ため息をつく。

ご機嫌斜めな犬は吠える。吠える。吠える。

よくもまあこれだけ吠えて、喉が嘎れないもんだ。

「犬の言葉はわからねえんだ。」

俺は犬に向かって吐き捨てるように喋るが犬も俺の言葉を理解していない。

まあそれもそうか。

一人で納得した俺は手足を広げ、

「俺の」

言い終わる前に犬が飛び掛ってきた。

俺は犬の思いがけない行動にびっくりして、動きが取れなかった。

足は噛まれ、腕は挟られるように引つかかれ、一瞬のことで俺は激痛にわめくしかなかった。

全身がいてえ・・・。

「この糞犬が」

なんとか力を振り絞って犬に手を伸ばす。

指が何かに突き刺さった感触。生ぬるい感触。液体が指先から手へと伝わる。

犬が後ずさった。

暗くてよく見えないが、犬の右目の周りには赤黒い液体が流れていた。

瞬時に、俺の指がこの犬の右目に入ったのを理解した。

理解して、俺は、逃げた。

犬に背を向けて走ろうとしたとき足に激痛が走った。

ああそうだった。あの犬に足を噛み付かれてたんだっけ。

俺は、足に力が入らなくて、犬に背を向けたまま座り込んでしまった。

それを、あの犬は放っておかなかった。

右目の恨みというように、俺を押し倒しす。

俺はなすがままに、動かなかった。

首筋に生暖かい息がかかったのを俺は感じて、そこで、俺は意識をなくした。

第三部「無視」(前書き)

遅くなりました。

第三部「無視」

私には記憶がなかった。

私が生まれたところは、人がたくさんいる街中で生まれた。

最初に目が覚めたところがそこだから、私はそこを産まれたところと呼んでいる。

右も左もわからないところに生まれた私は、ただただ人の流れに沿って歩いていた。

歩いているという感覚はなかった。建物に触れているのに触れている感触がなかった。

ただ足を動かしてる、ただ手を空中に静止させているだけのようだった。

人の言葉は聞けたし理解もできた。だけど、私の声は私の中に流れるだけで、相手には伝わらない。

私は・・・誰なの？

つぶやくけど、それは自分の中にしか流れてこない。

ふと、私は足を動かすのをやめて、空を見上げた。

何故？私はいるの？

ずっと生まれて考えていたことだ。

何にもできない私が、何をすればいいのかわからなかった。

目の前には大きな鏡に映された私がいた。

でも、人々は私を無視する。

私はここに。

ちゃんというのに。

何で？無視をするの？

私は通り過ぎる人たちに声をかけた。

あの・・・すみません。

しかし、誰一人

お尋ねしたいんですけど。

止まっではくれなかった。

止まってくれませんか？

本当に見ず知らずの人から無視をされ続けた。

いい加減にしろ！！

怒鳴り声をあげ、私は一人の青年の肩をつかもつとする。
私の手は、青年の肩を通り抜け地面に落ちた。

・・・えっ・・・？

第一部「会社」

黄色い線を通り越して、僕は改札口へと急ぐ。

人ごみにもみくちゃされながら僕は「あゝ可愛いこのケツとか触りてえ」等と実にけしからん事を考えていた。

カードを改札口に通して、反対側にカードが出る。

今では、携帯とかで改札口を通ることができる。

僕は何気ない時代の変化に驚きつつ、感心もしていた。

「ありがとう。いつてらっしゃい。」

窓口から顔を出して通る人々に声をかけるおばちゃんの顔が見えた。

僕はおばちゃんに一礼して

「いつてきます」

誰にも聞こえることなく僕はつぶやいて颯爽と歩く。

機械と時代は変わるけど、人はやっぱり人なんだなとつくづく思う。

何気ない一言が嬉しかったり、ちょっとした事で傷ついたり。

僕は微笑んで、街の中に溶け込んでいた。

駅から数十分歩いたいつものビルの中に入り、僕は警備員や受付嬢に挨拶をして中に入る。

机が並ぶいつもの風景が見えてきた。

はぁ・・・。

僕は自然にため息が出ていた。

今日の大半をここで過ごすのだから気が滅入るな。

「さて、今日も張り切って頑張りましょう。」

一番奥の席に座っている生意気そうな顔の部長がいつもの時間にいつもの言葉を皆にかける。

皆はいつも通りパソコンに向かってデータを入力していながら、部長の言葉に耳を傾けている。

なんで、いつもこんなことしているんだろう・・・。
と俺は、いつものことを考えて、

「さて、今日も張り切って頑張りますか。」

同じ言葉を繰り返していた。

第二部「力という光」

「ねえ・・・お母さん、助けてよ。」

「皆・・・やめてよ。」

「僕は皆と同じだよ・・・。」

「ねえ・・・ねえ・・・なんで？」

「助けてよ・・・。」

一人の青年が大勢のものに囲まれている。

その中の一人の男が口にした言葉。

「お前のせいで皆迷惑してるんだよ。」

それに同意するように周りの皆も口々に一人の青年に向かって悪口を言う。

「何でお前がいるんだよ。」

「お前なんかいなくなっちゃえ」

「早くこの街を離れて」

一人の老人が前に出てくる。

「静まれ！！」

その老人が大勢の者の前に立ち口にする言葉。

「皆、口を慎め。」

老人の目が俺を離さない。

「禁忌を自ら進んで犯したのはお前じゃ・・・。そんな者は我らは仲間とは呼べない」

「俺、知らなかったんだ。あれが・・・だなんて。」

大勢の者に囲まれた者が言う言葉。

俺は弱かった。いつも陰で、暮らしてきた。

生まれてから光に当たることを許されていなかった。

そんな俺の前に、力という光が見えてきた。

俺はすかさず光を手にとった。

そして、俺は陰の世界から闇の世界に身を投じる。

光が俺を誘うように、俺はまぶたを開ける。

朝が来てしまったか……。まだ完全に日は昇ってはおらず、冷たい空気が体を刺した。

周りを良く見てみると草木に飛び散った血が散乱していた。

血は黒く変色しており、その中に夜俺を襲った犬がいた。

犬は丸くなっており、体は冷たくなっていた。

「血をなめたか……。」

俺は一人悟ったような顔をしてその場を去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3830d/>

月夜の下で会いましょう

2010年10月28日04時49分発行